播州名所巡覧圖繪　五

内閣文庫
和書
類 二九〇五四
號 五
冊 九
架 一七五 函

内閣文庫		
番號	和 29074	
冊數	5 (5)	
函號	175	136

国立公文書館
National Archives of Japan

播磨名所巡覧圖會巻之五目録

龍野鎮城 武官一社 寺院十三寺　龍野川　三社明神　城山城趾
小柳清水　小神　梶山城址　行鴻ノ驛
粟原神祠　袋尻神祠　南天ノ大樹　赤松則勝墓
夜比良神社　中鳴寺　平井保昌墓　金剛山城趾
龍門寺　宍粟川　逆水清水　圓融寺
伊津の浦　城山　亀ヶ濱 獅子岩 とびり石 七曲坂 地獄谷 八幡松 山伏岳 炭焼谷 鰐口岩 順城岳
小ヶ濱　池の濱　大覚寺　門跡
室ノ津　室ノ明神　正殿 別雷皇太神宮 片岡社 吉田社 本社社 若宮社 八幡宮 荒神 牧尾社 棚尾社
岩本社 二層塔 梶田祠 住吉社 絵馬舎 河合社 稲荷社 白髭社 鐘楼　小泉川神子
神宮寺遺跡　天王祠　見性寺　浄名寺
大雲寺　正洞院　正法寺　浄運寺 大石墓

圖書局文庫
教部省文庫印
内閣圖書
内 一〇二〇二號
国立公文書館 National Archives of Japan

大聖寺　観音寺　寂静寺　徳乗寺
不二島　法輪院　御茶屋　多居大治遺跡
尾崎浦　竹岡尾　陀羅尼渓　柏浦
瀬戸　金崎　鷲崎　螢崎　荒川水　向灘
唐荷島　燈籠堂　陸村　那波　同浦　同大崎
得乗寺　那波城趾　徳業寺　相生　宝眼寺
高通峯　坂越浦　同湊　同泊　君しま　鵜しま　生島　神石　明石寺　天神　小倉沖　赤石　明神　物見
妙見　大避明神　妙見山　備後三郎墓
観音寺　常楽寺　亀の甲　尾崎八幡宮
鳴渡石　新濱村　赤穂塩竈　同製　伊和都比売神社
唐船島　中村　狐川
赤穂鎮城　花岳寺　忠義塚　同碑銘　遠林寺

大石屋敷跡　西塩濱　大津　愛宕大権現
長楽寺　西山寺　尼子墓　若狭野
和泉式部宿木　菖蒲前塚　八保神社　高峯牛頭天王
神護寺　千草川　有年驛　有年城跡
遍照院跡　五百羅漢　矢野里　観音寺
三本卒都婆　小鷹山　小鷹石　無我山
法雲寺　宝林寺　光明山城跡　感状山城跡
鞍居神社　白旗山古城　苔縄古城　價恵便古跡
大聖寺城跡　舟坂山　備後三郎墓

龍野鉄城 脇坂侯の居城なり　新田義貞始て當國一國に帰ふ義貞亡びて足利家になりて赤松則祐に帰ふ満祐叛逆の後は断絶して後赤松政則に帰ふ延徳年中當城を構へ猶子政村に亜墻の城を譲る是當城の始也○郷内は揖東揖西飾西三郡に跨る荘廿一郷凡百五十一邑東は播磨西は那波野小犬丸にまでり小は香山聖岩を限り南は網干新在家東西凡三里余南北又里余竈数千軒寺院十二ヶ寺氏宮一社別當正覚院

古の驛道は山の小路にありて揖保の小坂佐山下より書写坂本にまわり飾西郡をめぐり大市郷網干中村の辺にいたる今の宿村にあり藤江良の源りと號へ布施にかゝる小犬丸光明山の下よりある田地の間をよぎ舟渡にある山陽道これ也今に道あり元弘に赤松勢船坂を先塞ぎ新田義貞先陣江田大輔書写坂本に着陣とあり今の街道の源也

○土産　鰆　ヒロコ　辛大根　海藻　山椒他國に勝る　栗　楊梅　砥石
燧石　厚紙　烟草入　醤油

○市三九ノ日六日より宍粟佐用赤穂新宮林田等より三ヶ月ばかり来て売買す
○舟は龍野揖保よりして大坂九州諸海上より修保川に通じ浜々凡三里○近年陶器を作る家あり

龍野川 龍野の東にあり
川上は宍粟郡に流を合せて揖東郡を経て海に達す網干あり

○臺山といふハ今の宮乃山なり

三社明神　白山にあり　小神村にあり　産霊神といふ　文明三年実に鎮れ

城山城址　平井郷中垣内村にあり赤松二郎伊豫守義雅の居城也此城ハ山谷深くして
南ハ小屋郷より遠境の数百里も眼下に遮り林森に揖保川の大河あり細川山名乃両勢
三万余騎をもつて厳敷責けれど遂に嘉吉元年九月十日城山の城一時の間に落城に及ぶ
嘉吉元年より応仁元年まで廿七年の間赤松家中絶ス此間山名宗全が領となりし万年

小柳清水　平井郷清水村にあり　揖磨十水の其一なり　小神　小室郷小神村にあり　長者の宅地といふ今尾上と書く

梶山城址　河内庄江川村にあり谷沢甲斐守政国是を守る永正年中赤松政村是を攻落す　行島驛　神戸庄行島村なり陣ありて驛より　宴につぎて有年へつゞくなり

桑原神祠　川の辺　桑原村　伏義尻神祠　伏尻村　南天燭大樹　川の辺伏義尻乃神木といふ　希代の大樹なり

赤松則勝墓　川の辺中陣城址より西北之人　元久の居城也城山城落城の時討死を　夜比良神社　武内中陣村にあり　今ハ八幡と書川の辺に閑居して

摩耶谷山中島寺　石見庄中修村にあり　平井保昌墓　平井村にあり老後に此地へ閑居して終を遂し也をついで終へり

金剛山城址　佐々木三郎盛綱十二代加地左兵衛尉義綱嫡男加地刑部少輔信盛文明中
赤松政則の招きに応じ備中水田乃城より爰に移り子息水田左近将監義
実当城を守る永正八年細川政賢に属し船岡山に戦死を

濱

天徳山龍門寺　網干濱田村にあり禅宗　開基盤珪和尚伽藍大地之

盤珪佛智禅師ハ摂州揖西郡濱田郷の産にて元和八年三月の降

誕也七八歳の比より万人に勝れ村民菅家の神童と称ス十一歳に
て父乃憂に丁ひ十二歳にて大学明徳乃論を講じ聞人皆感じ
ぬ同郷西方寺に入て不動明王に祈願して同国赤穂随鴎禅師
乃法流雲甫禅和尚の弟子となりて出家しぬ後弟子となる者百人
あり諸国に廣せし寺院を記すに其数五十余ケ所元禄六年
九月遷化ス年七十二歳元文五年に十年にあたり大法正眼国
師と諡あり

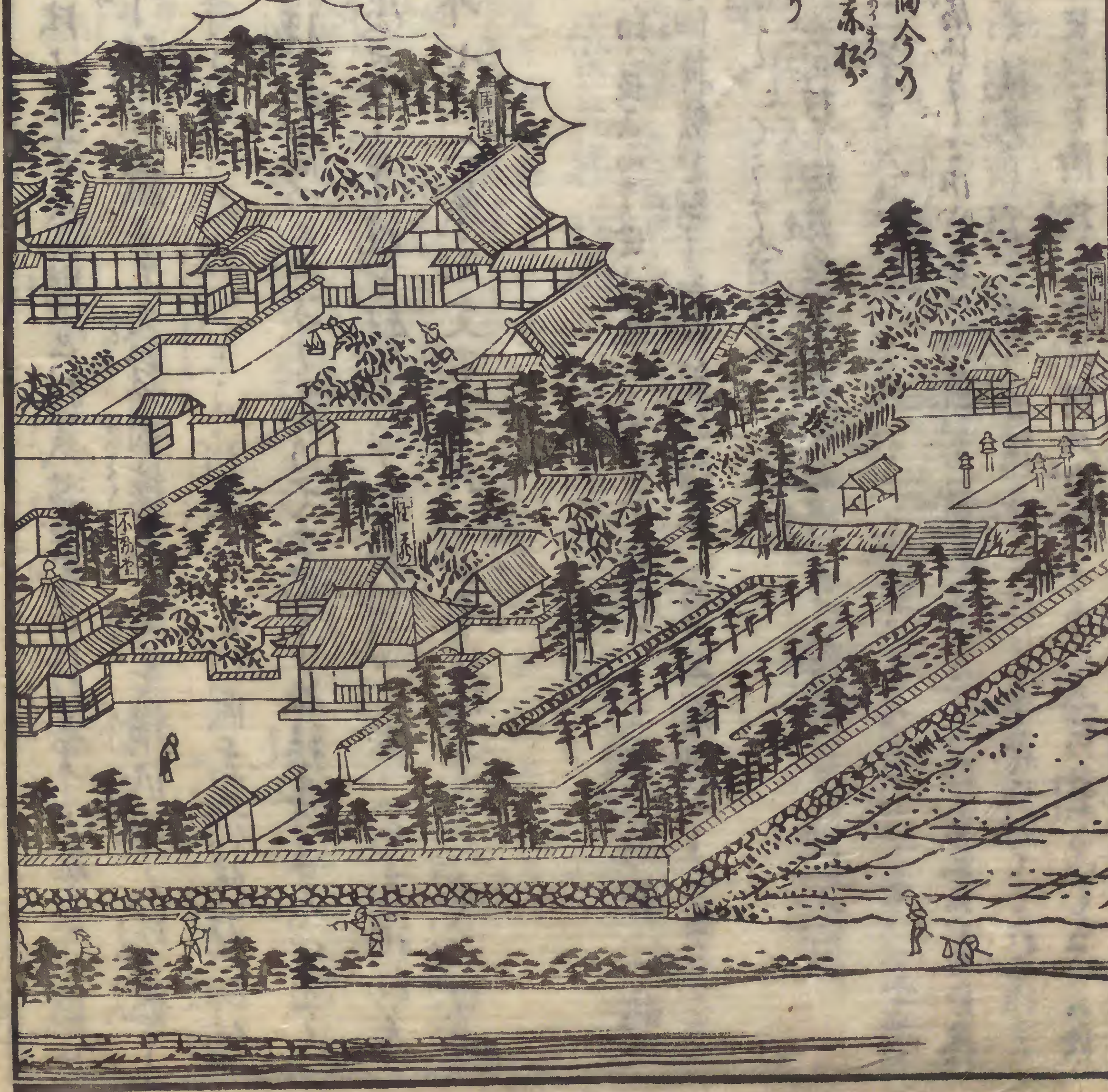
○盤珪法語など印板にありて世に是を尊む又吉野山まで両足の跌とそ腰座
の意をさとあはる白ヨ撓数を制し数へ孤ひ踊らしめして須臾にして両足立りき
とへり今に例としてつとふとなん

摂州揖保郡濱田村不徹庵の開基貞閑禅尼のりく禅師よりの御文の写

役り法種ハまし一年中入ハ其心にあてども法要るに法種ハや取り教えられ
此方何ゆゑく居ハまして法心易ハ御修行律行なく法心がけ候ハゞやうハ法
度ありハ去るがゆゑに実検して悟り度法是を法よく法種ハ所なてそれにはま
よひ候へハまし其心を御捨なされ只何の分別もなく一念の發るのもきゝ候

天徳山龍門寺

此地ハ釜千渓カりし和尚今のり
ぞく建立し堂舎再建ハ赤松が
一族荻原孫三郎光則なり
そのゝち墓あり　開山堂ハ
境内のおくにあり幽閑の
地なり元禄中
結構あり　結衆ハ
多余人在世乃
時ハ佛智弘済禅師
と称し希代の
大徳と謂つ
べし



に拘る意をもとめて我本心なりとする念をたえたる拙と我合点なれ
常に万事に付称んとも合ぬ事を肝要にてなれば只本心とさへ明らめ
なれば人が別に合点は入まじければ去るがゆへ是非を除て明らめよう
迷ひやは只本心は拘より念をたえたるのよふなるをよく心得べき
めは人が善に付ても悪に付ても世間に付ても佛法に付ても人の事に
付ても万事に付ても拘る意にかゝしも貪着せずして詑る止むまじに
称れは人が志称んとも本心に叶ひやは念は見より実よりのゑんに拘りは有
意にまとて妄念は本心をきるもの志て本心とふるゝ門あきるをえん
ならでなれは何事も宜るでや入ては不足なし

此貞闍尼は生国丹波国俗名くに原をてよし歌人之盤珪国師の御弟子と成り剃髪して貞闍尼とうづく庵室今にあり

宍粟川（しそうがは） 龍野川の末流

笹水清水（さゝみづしみづ） 細干東濱村山下にあり 十水の其一なり

伊津の浦（いづのうら） いづの出村之海人多し此浦の南の海に志南とらいて石塁あり海深の時はいつくの大石乾てはしまる近辺の者家を設く唐ありに浚本親きを安まれ

稲富山圓融寺（いなとみさんゑんゆうじ） 稲富村にあり 紺紙金泥の経ありこを仏来とさし

是より室津まで一里乃間を七曲といひて南海浚くして山岸経の岩
壁の磯を傳ふ其汀は左ゆく右に寺の山室に從耳へ七ツの入濱あ

て其間道をよぎれば　此より一里の間浜辺の眺めありそれは不来崎一堤二堤ぞその邊達あり眺甚絶景なり尚画上にあらはせり

城山（しろやま）　室山之西にあり赤松城跡あり也　此城は元弘の比赤松次郎則村入道圓心築る所なり即圓心の嫡
子信濃守範資乃三男本郷揖東郡の守たりし則
の次男雅楽助則祐と兩人籠りしが建武にある氏郷西國落の時新田義貞
是を追て播州に下向し江田大館をして室山の城を責しかば赤松討まけて赤
穂に退く其後中絶しけるが圓心六代の後胤赤松兵部少輔政則播磨備
三州安塚の時此城を修補して數年浦上に至り則宗として守らしむ
其子石見守村宗同美作守政宗三代相續ぬ然るに赤松政則死去の後
嗣を立幼主二代目乃政村と浦上父子權執たり村宗は逆心を企て内論動
龍野の城主赤松下野守村秀政村より幕下の人々小大名の與は同論動
解由範秀をはじめ平井備中守江見備中守圍山兵庫ら下五百余騎を
率いて室山乃城を攻る此勢大雲寺の山下より明神山のきはとほの西三町よ
馬を乗入れば龍紀に元来て溝つけひさしく責まうり折柄城中に政宗
乃嫡子孫四郎進宗景の婚姻にて酒宴半の事なれば不意の事なれば大に騒動れ
されども政宗古老の勇者なりしかばとうとう下知をなし寄手を追散し戦ひけり
あはれなるは今日婚嫁せし宗景の妻二八年なるが小長刀を是て敵を数多
薙ふせ終に自害しける気節の事を残しに更に入りしかば政宗が今は叶はじと

まひが濱

漁夫の家舎あり網の
並干網をさらして
なぎさ汀なり

獅子岩

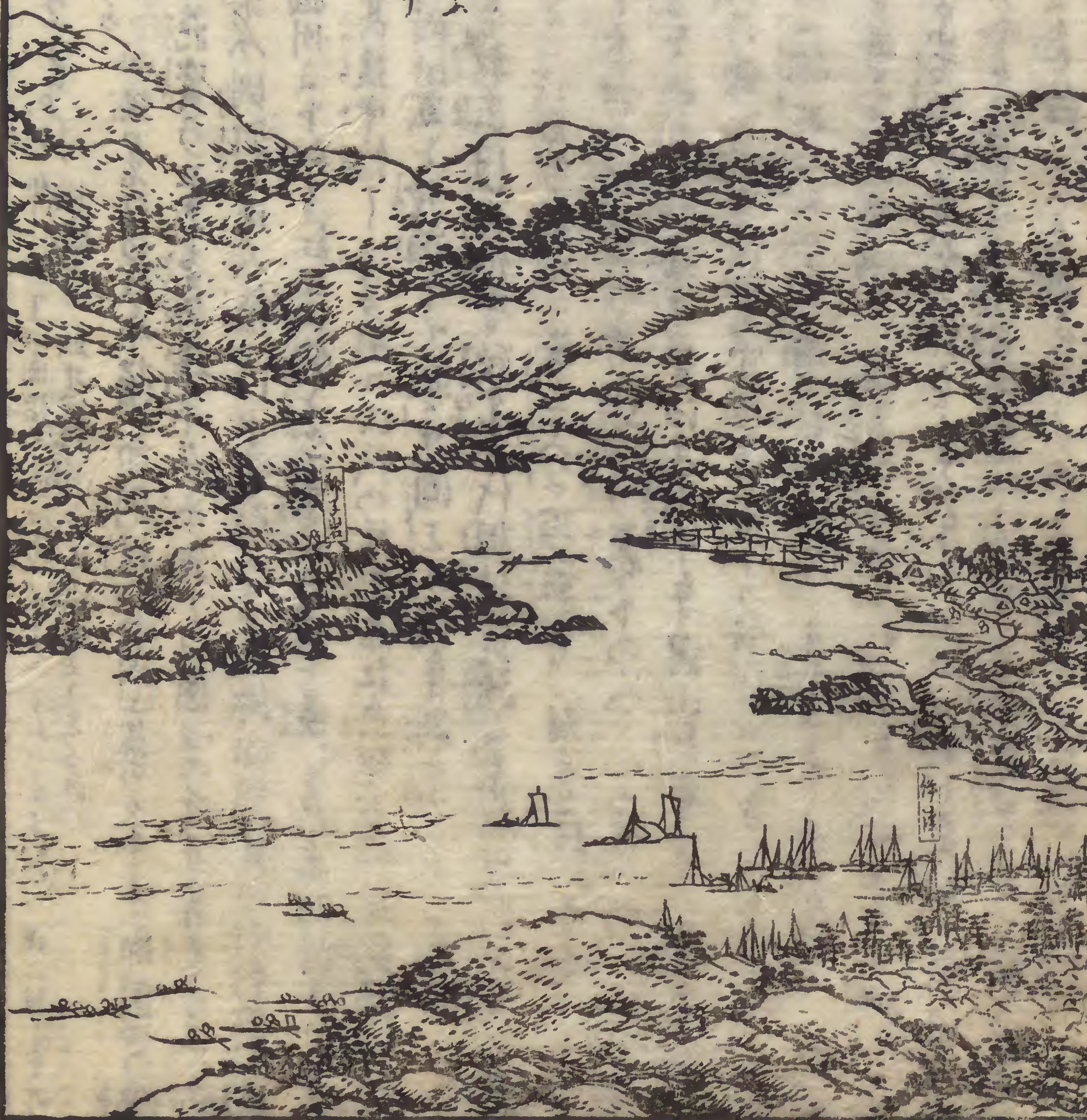
七曲の中にあり獅子の
躊躇に似たり

虎焼谷

七曲の中にあり松浦家より
其の樹木濫りに焼しより
名づく

ともの石

大石斜に横たはり
潮にて海にまうつりぬれば
船への柱の形



七曲井

傾城嶽及石塔

七曲の中にあり昔し
室の傾城此山の上より
海中に身を投し死る
名づく

山伏嶽

山伏の落流せし
ところなり

錫口岩　岩のさまへ似たり

地獄谷

七曲の中にあり若殿が辻
合戦の時軍卒多く討死
し折しも法火の家々と
なり

下しら濱

室明神らちかきあ
宮浦に遠し財
木を伐下しける
所なり泊
灘なるべし

池の濱

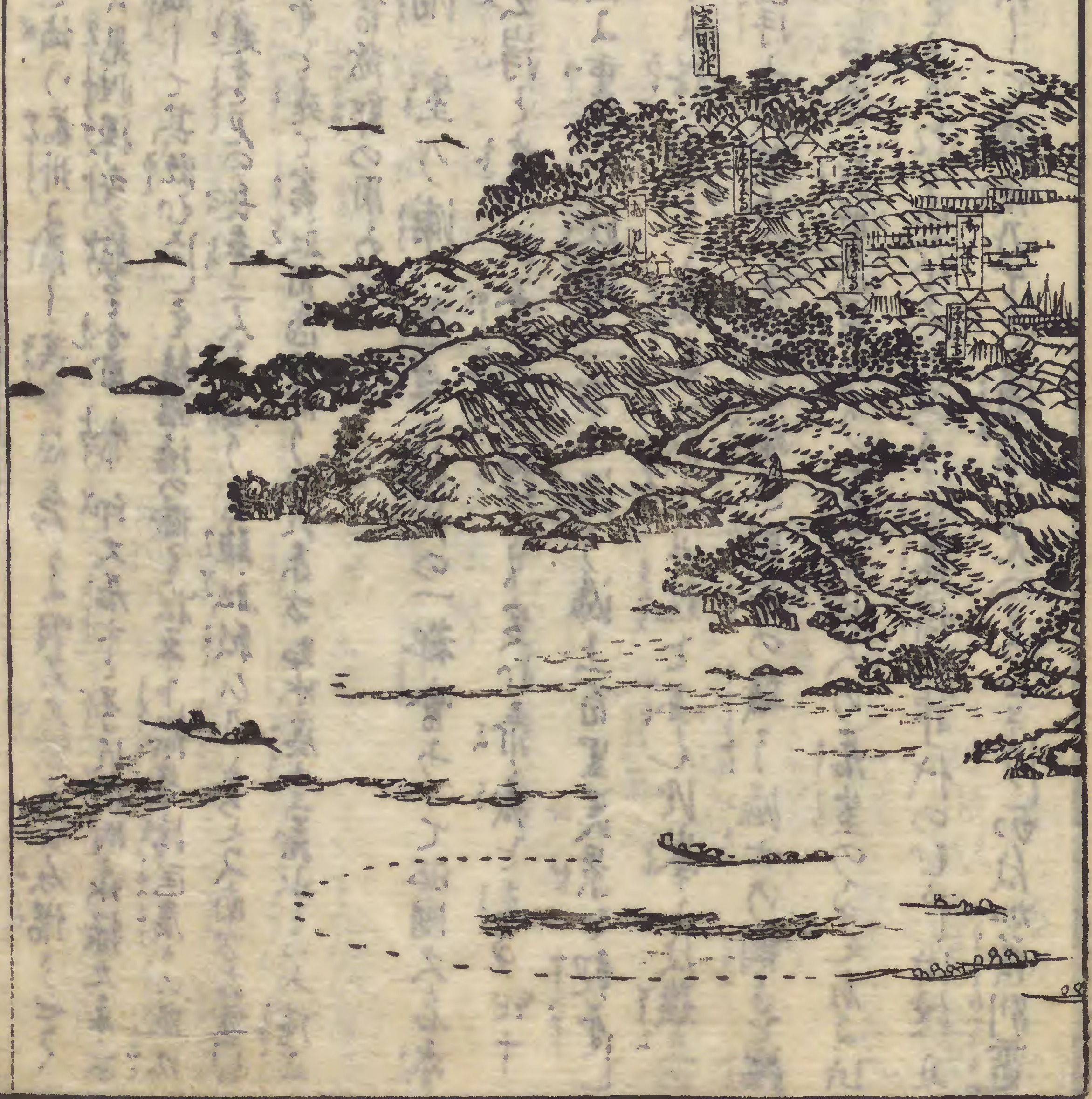
昔此あたりに池ありて
入西浦ともいへれ
室は入江の奥なり
かうて室泊といふは
是より西浦の名なりし
是入江の奥の汀に
の家村々あり大
賊又其の内三鼓
右門より但ね深くは
但馬の後家されば
どもいまだ乙なりが

まへのまうでに
平地に猫とうけ
うへて鰯と黄
千代の松ひに
後陸浦へ行事
実に出た

門崎

城山峯つゞきの崎に
はら右城門の跡

室津



嬌子宗景を彼の備州に落し其身は忍びて明石大蔵谷に仮借させしく
切腹しけり彼頼は見性禅寺に葬る雪甫常印大居士と号しけり此時永禄九年正
月十一日落城して其跡むなしきを後姫路の城主松平下総守清匡虔かの城跡
に番小屋を建て足の兵卒二人を置り其跡松柏ひのきしとなく又南方古城門の
跡は桃爺爺を建て當社目出の鎮りとし東方出水處室蔵水として清よ
虚空藏菩薩の若城郭の困のみ

室津

室の泊　室乃浦　室津は播州の一都會にして西國大名參
勤往来乃泊岸と定め又舟舩の津とも定む帝都を去る事凡十
二里山は三面に重りて江湾は一方に開き海上百里美景を欽尽し
泊舩は池中に在がごとく旅客は波上に枕と安んじ峯には樵夫の
斧を響し山岸には遊女の糸竹に媚き國守の驕り海士の綱手と潜
せ城に遊若樂寄覧の男あり○室とは人の居室のごとき左に此
江の事まはじこりけるふたるにて名付○舊傳曰神代のむかし此津に
泊舟して晴夜乃ごとく道路も見えざりしかば加茂別雷

神日向國高千穂峯より此に影向し葵蔓を代挑ひ給ひしと據
として今の繁昌にのべりといへり西海往来乃客舩風波を凌ぐ要津
となり高藤居士乃便客商人の交易にまぎるゝと此津に繋ざるはなき
なりといへり又大明の金華縣に擬して金華津とも号するといへり

夫木　むろの浦乃せとれ待る鳴海の磯こそ波にぬれまさるらる

家隆　山のまふかでてりせぬ夜は室の海にかまへひよりとふ舟人

此余歌多しこれを略す○貫之土佐日記にも此津の事をいへり
公任御朗詠集曰菅原為雅周防守に赴て下向の時此地の風景を見ていふ

曉入長松之洞巖泉咽号嶺猿吟
夜宿極浦之波青嵐吹号皓月白

義満公厳島詣記曰
午の時ばかりに室の泊につき給ふ中略此山のふもとかもとそ社おはし
けり中略此社は加茂のみやのとまりの社なりしその昔あまのいけまつせ
て御まうしけるに社はいとちいさくて綴つくりたる数ありてまうでく神巫
ども集りて拍びすゞしれは御前のかで雨風乃難ひなどの御いのりし侍とて
そきこゆる雲まけんの御ちからひま押ひうけぬるの御かりまたの良く
ぞ覚ゆると云

室明神社　室の津明神山にあり　正殿は加茂別雷皇太神宮　東は行事社・吉田
社　西は貴布祢社・若宮　之吉田の東に杉尾社　正殿の後は河合社・下鴨
御祖神之　其西は権殿　之二層塔には多宝仏を本尊とす　むかし貞治の頃当津の十合氏
これを建立せり　其荘厳にして　八幡宮　塔の西にあり　棚尾祠　旧足門の外にあり　岩本橋本祠　梶田
庭弾守に任ぜられしとなり
祠　昔は棚尾の後にあり　白髭社　鳥居の側にあり　鐘楼　鳥居の東にあり　此鐘は当社神宮寺の鐘也　元和年中
中将津家人加茂康忠広など寄附して鋳らる
とぞ　神宮寺遺跡　今は廃して社人国氏の居宅となる

神傳曰　抑当社乃御神は日向国高千穂峯二上嶽より洛北二葉山へ遷らせ給ふ　其時此地に須臾留遊し給ひ　厥后加茂へ光臨乃時神職三十六人末信をとらひ給へりかの藤葛を伐払ひ湊と開き給ひし斧鉈鎌の三刀を今も末社の神と崇め奉る　此三刀倉室町にありしが今も紛らへさし

例祭は小五月祭ありと称して先加茂競馬の神事をなすに準ずるところやその附当社乃神主上加茂七家の内なる居大路氏都より下向ありて法儀所に務し旧例の祭式あり　此神事は例年にはあらず凡五十年の間に二度ばかり祭の日限も定まらず又月日も定まらずなり

日は遠近の諸人稲麻のごとく其日の賑ひいはん方なし町中には家宅を飾り一門加田乃来宮酒肴の饗人家に集ひかしこに群り一津今すねなし祭日前後凡十日諸は家々の業を停て祭式の調度のミに躍あり皇都の葵御蔭につきて胜羅となる祭式なりとぞ

天王祠　明神山の東の林間にあり祭神牛頭天王六月六日七日には華洛の祇園会に准へて御子祭を奔し神輿を出し此日は明神山の祭礼とかはるなり

佛通山見性寺　室津にあり禅宗也　開山は微翁寄君五ヶの懸舎を建立しける其一寺之開基は常海龍符和尚之其後落湯相国寺の元中和尚を招請して中興なし給ふ阿弥陀佛也の方に薬師堂あり末寺多し

○浄名寺　本尊聖観音　久津寺ともいふ　○大雲寺　本尊薬師如来　天神の社　毘沙門天　荒神の社あり

正洞院　中興より禅宗となり其門下に寺中和尚乃開基となり大地にして大衆百余人ありしが永禄の乱に破滅に及びて法ありて常光房といふ　○正法寺

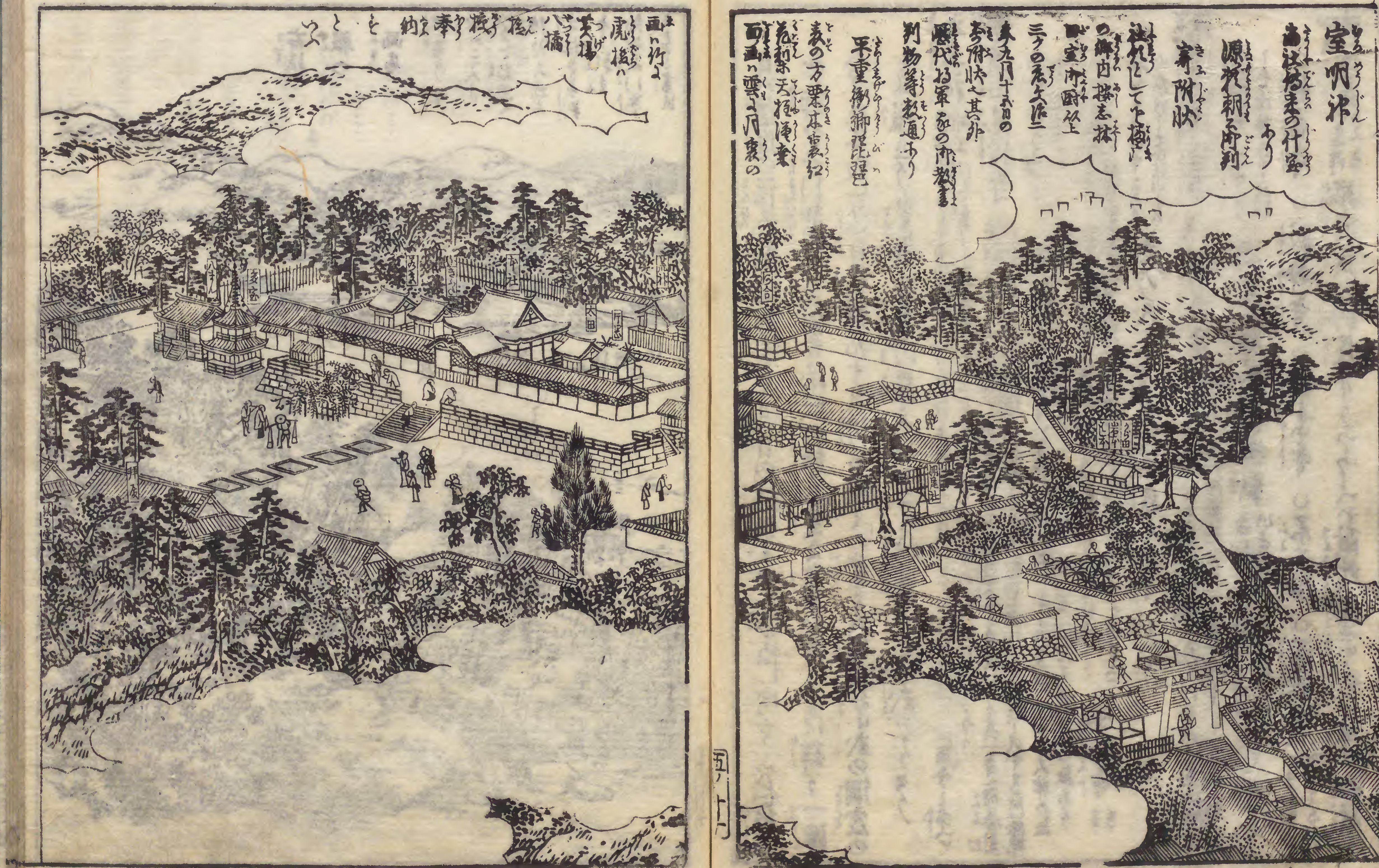
本は天池の中にあり今は移して正法山と云　右乃五ヶ寺皆室君建立の寺なりとぞ

清涼山浄運寺　本堂　友君墓　当津にあり浄土宗知恩院末墓は門前にあり開山信誉社因誉上人中興　上人おもふるは阿弥陀如来なども西方寺と号し後に此寺にして浄運寺と改む　円光大師所縁御影　当代天明年中に再び此寺にうつせ給ふとなり

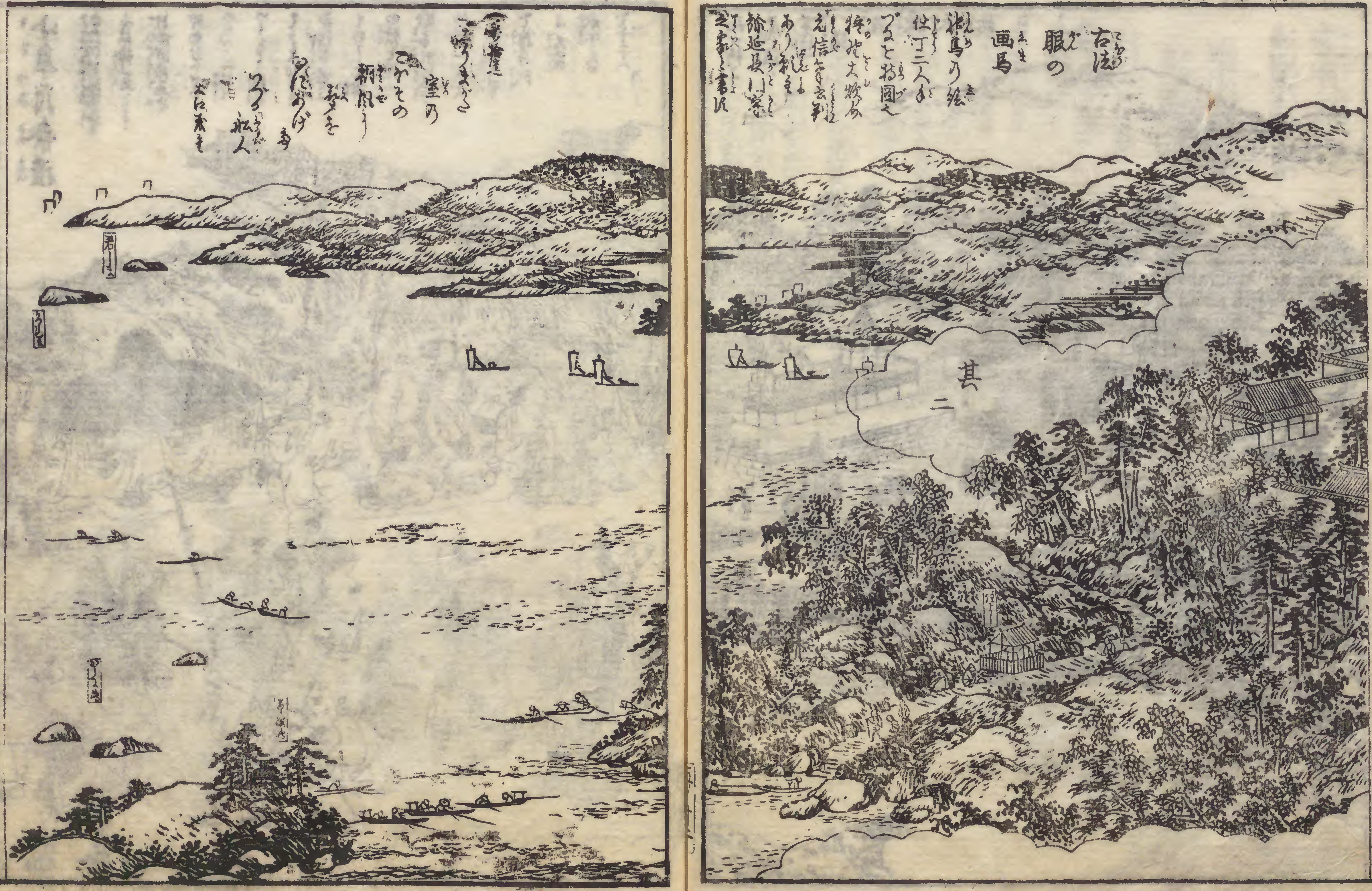
○観音寺　○寂静寺　○徳乗寺　○不二庵　○法釈院　六ヶ寺ともに当津にあり　○大聖寺

御茶屋　当津にあり　姫府侯の別荘なりつねには政所屋敷といふ　池田輝政の

室明神
当社伝来の什宝あり
源頼朝公御判
寄附状
社頭として[illegible]
の御内[illegible]
同室町殿御判上
三ケの寺文證
来九月十五日の
[illegible]其外
歴代の将軍家の所御教書
判物等数通あり
平重衡御[illegible]琵琶
表の方栗木[illegible]紅
花鶴に天狗蒔絵
面画ハ雲に月裏の
画ハ竹よ
虎掛ハ
笑揚
八橋
[illegible]奉納をとぞ



五ノ十二



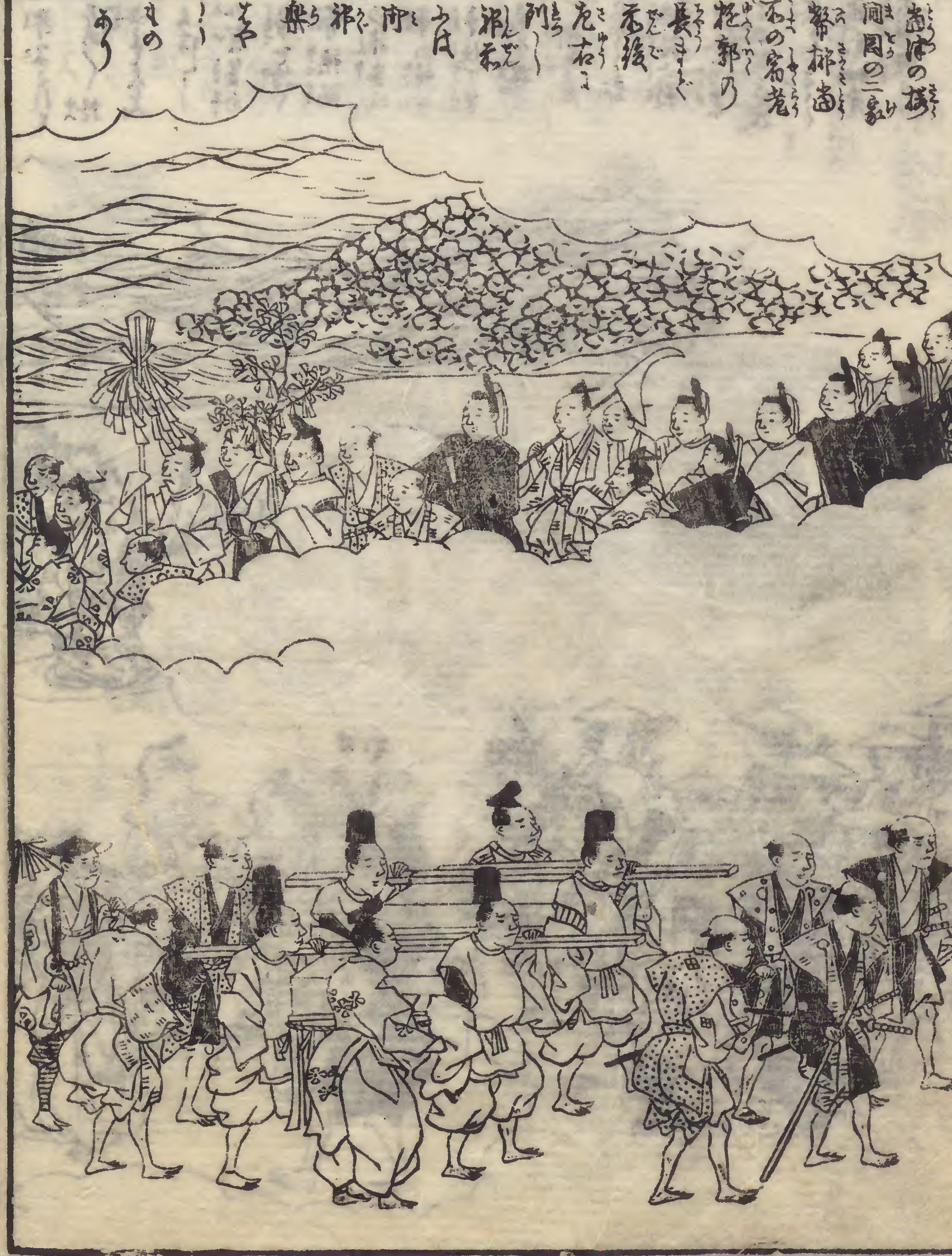
古法眼の
画馬
其二

小皐月祭禮

先づ祭禮の始め
に神輿を先と
して吹流に風車
町のけいせい
二人づゝ二行
つゞき神の
ともまひしさ
き幟を職人
もつして棹
の秋を祝ひ
獅子頭狂言多
の所二人づつ
一人は金幣
を捧げ後
に天冠
水干太口
と十二人

神子これも
そのく様
女ども大ぜ
ら
この神酒
幣を捧ぐ
加賀笠白
の神楽三
本の踊児
も仕丁等
先を雑へ
て供奉ん
多勢し素を
選び士数
十人弓矢
太刀等の神
器をさゝぐ
神主加茂
大路次う

其二


當津の揔
岡田の三家
幣帛番
町の宿老
遊郭の
長まで
前後
左右に
列し
神輿
には
御
神
楽
をや
もの
あり

創建之西海往来の諸侯朝鮮人など饗應の所となれり

鳥居大路遺跡 当津明神の祠官加茂縣主名居大夫治大夫勝太夫等後下従平の代に造立して霊殿と号け明神勧請の社檀なりし今廃して名ばかり遺り藪の中に年徳神の祠あり

堅石清水 当津藤振浦にあり 基此地は深泥にして新なる事なし 荒廃して今泉名寺の如くなりぬ吾故の巣地なり

遊女 当津尾地町にあり 俗称にて傾城のはじまりなりとぞ 西屋伊馬屋木綿屋三軒其外樂戸なんど多し

昔此津に花漂といふ寿拳白拍子の祖其人あり 艶色又類ひなし 能書にして和歌を詠じ遂に後世元戯を業とし本朝来示の長なれば室の君とぞいひしとなり て傾城といふ 此等は和漢外戚傳に見えたり中興其後宮城野友君大柄抜など名高き遊女ありしと室遊廓尾地町の記録にみえたり

或云室君といふは昔書墓の長者が家の長となりて釋にいたる今の本陣宿の類なるべし 昔は其家の主は皆女にて云家廠上人の流人又は諸大名の泊りに酒宴の饗應に侍り色香をもて身を立し之後には其家に教養の遊女をまうけ旅客一夜の衣を脱しむる 当津の室君室の長なるべし 此義に寄し後世これを傀儡ともいへり

○門遊女普賢の化身なる話

撰集抄 性空上人は日比法華読誦の功によりまのあたり六根浄の功徳を得たりといへども生身の普賢菩薩を拝し奉らんと七日祈念しけり 七日の暁天童来りて室の遊女が長者を拝がめとしめしてその普賢なりとおしへて失せぬ 教のまゝに室の長者が家に行て宿りけるに折ふし長者出合酌して上人に酒をすゝめ奉りて周防のみたらしの沢邊に風の音信てさゞ浪ハ並び居る遊女ともに同音にうたふ 浪の間やとおもひて先ぞ生身の普賢なりやと拝りひ目をふさぎ心をすまし給へば普賢さんぜん柔和の生身の普賢白象に座し給ひて法性むろの大海には恒順の月の光ありありと うかれせ給へり又目を開きて見れば遊女の長者の姿なり 又浪の上人たつてなくなく立給ひし時限りなく拝して出給ふ折に 一町斗去給ひて後此長者卒身まうかり遊女として年をおくりしに どもとも生身の普賢とはさとり給ひしと

暗下

○鹿苑院准后義満公厳島詣の記に云 周防国むろづみといふ所に泊りぬ。むかし生身の普賢のまのあたり拝まんと祈りける人有けるが、こゝぞ生身の普賢よとて此所の遊女を拝しける所ぞかし。所のさま誠に面白し。岩をかるく切られてそびへたる峯三ツ四ツ並びつゝ松柏むらむらとして深山木苔むしひさがりて浮雲かゝりて有と云

○今案撰集抄には室といへども江談抄には同語に付て神崎といへり又暁筆記には江口といふ又撰集抄の遊女の歌によみては周防の室積や又義満公の記にも室積と室積も即船着にて遊女あり普賢堂あり本江口に普賢堂といふを建て普賢を安置し ○性空上人普賢を見んとの苦行あるしの妄説に疑ひなしといへども退きて是をとくにまゐるべからず

其成は普賢遊女白拍子の名を付られたる今のごとき流れの身のしきりのよはあしく既清盛の寵せし白拍子に仏御前、祇王、祇女又乳守の傾城に地獄又朝拝或に昔の遊女の名に出せしに釼菩、小観音、文殊、普賢なども人よりあれが室にも普賢といへる傾城のありしと人の戯に教へしを性空一心に其心より行しかども知合なかりしが

尼屋浦
小濱荒戸のつきに遊女若小舟をさして出向ひ法然上人の教化を受し所也即尼となりて往生の素懐を遂げ侍るより此名ありといふ

竹図尼
白灘の中にあり室の遊女延朗中納言基卿に念ろに一とせ花洛への帰り又此地に帰り尼となり仏道を修せしとかや竹図の尼といふ今土人誤てタコタウと呼ぶ

撰集抄 播磨国竹の図といふ所に庵を結ぐ又も遊女のうちまじりしと語りけるとかや或時中納言の内の人の船にのりて西国より都へまかりけるを伺ひ見て髪を切て陸奥紙に引包てかく書けり

ほどもせぬうき身をとるものゝるをふたつまきても袖ぞかはらぬ　竹図尼

陀羅尼濱
竹図にあり此庵を結んで出家せる子手陀羅尼を誦しけるより此名あり此濱巌石嶮くして風景よし此尼の志持仏を岩巌上に安置しけ庵より翁書写山を運びしより此所を今仏像といふ

揖浦
室津西南の入口にありむかし志もあらね揖の出来ありし也今に此浦を揖浦といふ

瀬戸　金崎　鷺島　鳴島
瀬戸は室の入口にて少し波あらし唐嶋は瀬戸の南の山なり金崎は岩洞より綾書出る人に影くことあり

其南に鷺島其西を鳴島といひてしもに名所也

兼昌
室の浦の瀬門の湊なる鳴島の磯こし波にぬれるかな

又鳴島を尼島ともまた君島とも呼ぶ記の遊女の尼のすみしところなり

花川水
室より西一里にあり清き水早御名両港

向灘
室津に近く向へる浦をすべて白灘といふ此内に小濱南の浦と荒戸浦小濱と此所に山伏の石塔あり

唐荷島
室明神より東南一里の海中にあり里俗に曰むかし唐船破損して宝の荷流れよりて名とれ又前の島を唐荷の島と号すといへり三ツの島あり此島々を総て八重所の沖に出る沖の唐荷地の唐荷とて三ツの島ありて東三丁ばかりに並び岩あり干潮にはつゞきて満潮にはへだてる往来の通船此島を見て

てい舩とのりとげ做ろゝ中多し是よりぬく花の姫府候源忠次此雅を救はんとて舩首に入合じ
ゝ岩よりよ大石ぶ多く搆て其上よ標木を立これを知しめ給へり後世做舩の雑たりし

万葉
玉藻かるからの湾よいつより后ろかしもあまや我名そらん　赤人

燈籠堂　湊口よあり昔行基寺といへる寺の跡也今ハ海瀬東西二丁余南北十間許よ大石を以て築
其上よ毎夜燈を建て宮舩の為至夜毎灯籠を点て舩客とはしめらる燈籠ハ舩のまもりの為也

陸村　西國街ろ赤穂城
下への道かたり

那波　那波浦　那波大鳴　那波ハ海瀬の中へ入込しる一里許鳴より湊かたれ凡
今ハ入舩もなし里諺に曰那波ハ坂越室の泊ろるぐの美湊

ありて潮ハ甚たく
樹木繁茂せり

得業寺　此寺和泉式部宿本を以て極するとて寺の本の
糸さらしのおもく樹木しく他よ多くれたり

那波城趾　那波の在よあり宇野弥三郎重氏居城凡即赤松の門家也建武三年備後三
郎高徳ハ宮軍よ属したれども不運にして従戻一族の残党を今木大富和田
松浦などの十七族那波の浦よ住居ひ荻原が氏を率し皆付て勢ハ十族まて忠を慕て
進らしまた逆よ伊保の在よ退付合戦して高徳が又佐後等絶長たさらじめ此所一族よ
討るし海居村の辻堂ありしこと旦ひろ来りといふ

江林山徳業寺　那波よあり亀山本徳寺
末永保年中開基釈正房　桐生　那波より十丁斗一村湊人ハ他業なし
是より十丁斗西浜村よ温泉の流あり

温泉山慈眼寺　佐方村よありかへる観音山林境内又百間赤穂平嶽寺
亀峯和尚建立禅宗温泉今なし薬師仏有之

高通峯　此峯名るきよありて晩よ下らんとする比のなる坊出れハ向へよ赤穂の城よろふを入て
ちらく河尻の多き花ろ水光布とさうせらふ如くより大海の景くして多舩木の葉
のごとく樹林人屋往くよのむかひとして実よ画よかけるがごとし

坂越浦　門湊　門泊　海瀬三方よ山ありて東西北の風ハ受じ
浦人工商の人家多く繁昌の湊なり

生島　一名いるゝ島　坂越よあり　原樹繁茂とれども昔より斧を入るゝ事なし
五葉桑花香木茂く満り即大酒明神の旅所にして潴よ寄たり
見ゆる湊よりいもろくて一二丁許湾中よ搆たりて風濤をふせぎ
是が為ふ浦人の安居とぬる湊と島との間ハ深きる五十尋よ及
べり又小島よ若島といふあり

未木　朝夕よ定めうき世をうけくらはいき島よてそ住べかりけれ

鵜が島　坂越の海よあり　細川幽斎の狂歌よ
塩いまよれ浸されや鵜が島相子の内へ入まてもつまほ

神石　坂越城を去る十間ばかり岩二ツ
古人坂越を去半しと沈るよまり

小倉御前石　払並ぶ一方の岩よは石垣あり
の浜よりよ木ありこれ小倉の腰すべし又城山の森林の中よ五輪の塔殺あり
其ハ木よ小倉御前といへる人の石塔なるべし
波を出る事一丈よす斗此あたり深さ三尋許不思議の事之又赤浦よ御鞍

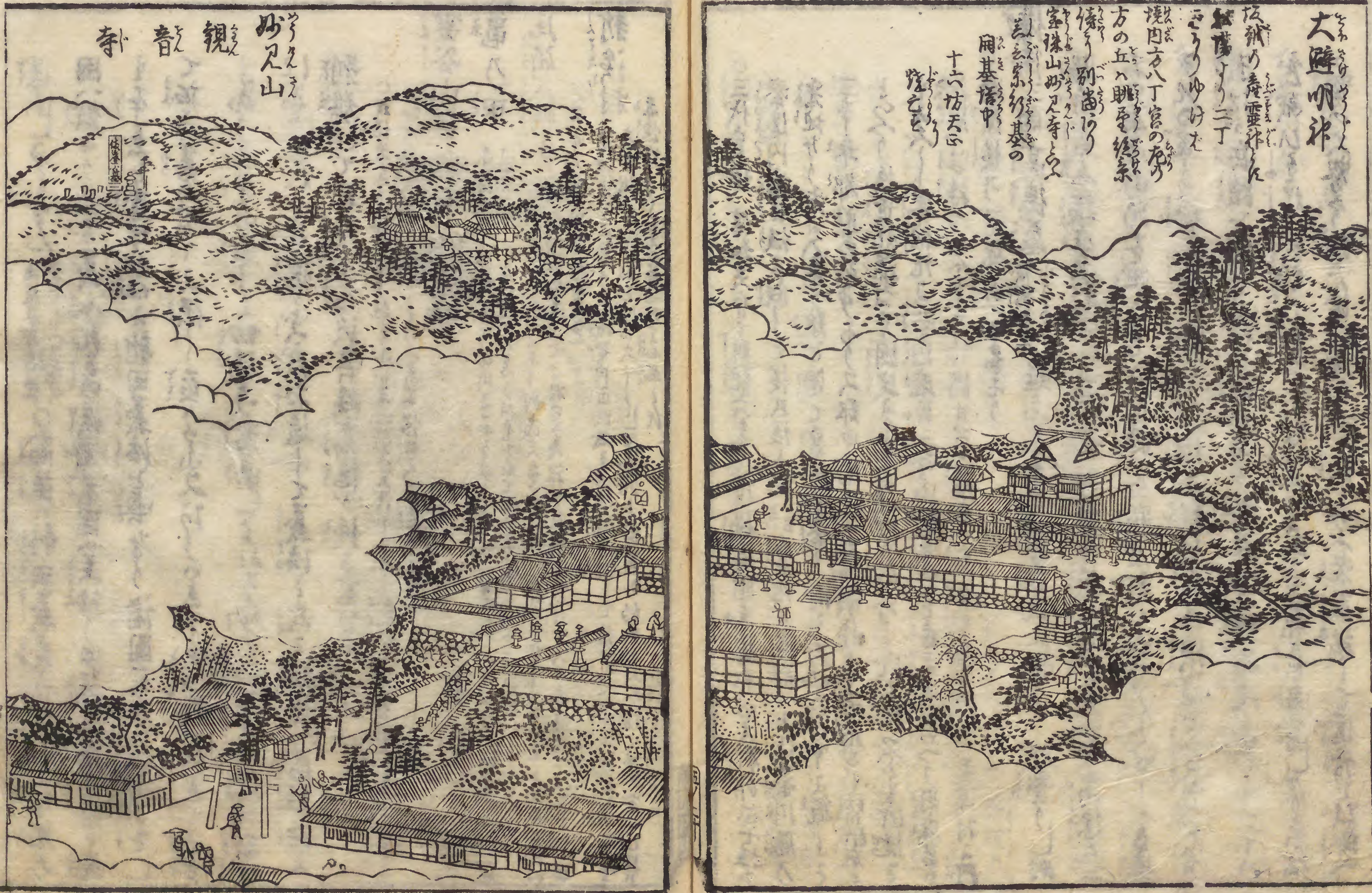
大避明神　東神秦川勝の霊を祭る　洛西廣隆寺よ大酒明神の祠
ありて秦始皇を祭るといふ

ま山城葛野の人よて推古女帝の時豊聡耳皇子よ仕へ皇子佛縁　川勝

坂越（さこし）

禁む悪を祓ひに祓せしめんとて河勝に授け給ふ河勝蜂岡寺を造営
して是を安す 蜂岡寺大秦広隆寺なり 皇極三年に東国富士川の辺りに大生部
多といふ者異虫を養ひて常世の神と号け信ずる者は財宝悉く
まかれにより郷里の人を損惑ければ河勝是を悪みて大生部を捕へて
妖術を糺明す 日本紀 又天神地祇を祭りて安国利民の政を布き
又六十六番の舞楽の面を制音律糸竹の術を修する河勝
より始むといへり ○神名帳葛野郡大酒の神社これ大秦へ
○ちなみに大避は人秦の難を避の義なるべし又秦姓の
始祖は仁徳帝に仕へし百済の酒君なれば其始祖を大酒と祀りしなるべし
又いはば大は御に同じき上古の字音之百済の人此土へ来りし事は国史
にもえたり既に雄略帝の代も百済より来りて先祖奥にも書ためり○酒君は
始めて蚕を飼ひ絹を織て献ず其絹を腹開をものは甚だ柔かにして膚の
如しきとてハダの姓を賜ふ又秦をばハダとはよめりとかや今も日本
に於ひて大功あるなれば君とひて神と祀るもむべなり尚後考あるべし
○續日本紀和銅三年七月播磨国始織綾錦云云

○三代実録 清和天皇貞観十六年八月播磨国赤穂郡の大領外正七位下
秦造内麻呂伝ふ叙して従八位上に云云 案ずるに当郡は上代秦川勝乃
采地なり故に入鹿の難を避て爰に来り住し時に矢野の山中に籠りしを
三年卒す都婆の故事なりて郡中あくに大避明神として祀るも皆此故を
といへり後世記録なくて国史にものこれざれどもさだかならねども此説さ
もあるべし峯相記に秦内麻呂三世山観音寺を建立するといへり内麻呂は
河勝が子孫なるべしされば尚其子孫の家は家属もあるべし 本濃村に河
勝僕従の子孫といへる家あり
備後三郎高徳墓 坂越村北山にあり 延元元年足利高氏九州より攻登りし時
脇屋義助播磨へ引退しに児島備後守範長子息三郎高徳と三
石の南乃山路を越へさしこしの浦へ出脇屋殿に追付んとせしが高徳
されの軍に疵を蒙り胴知する便なく深き疵を受て行方をあやまりて
赤松が兵路を遮てぞれが討やぶり那波より阿弥陀が宿にて十八
度戦ひ主従十六騎に討なされ辻堂に入て範長自害しける赤松
が勢の大将宇佐左衛門次郎重氏といへる者葬礼して遺骨を故郷へ


大避明神
坂越の産土神なり
社檀より二丁
計りゆけば
境内方八丁宮の後ろ
方の丘へ眺望絶景
境より別当なり
宝珠山妙見寺といふ
真言宗行基の
開基塔中
十二坊天正
焼亡す
妙見山
観音寺

遂りしかとかん 備後三郎高徳の墓といへる遺ﾘ之 ○高徳ハ新田義貞ニ属して伊豫の國へ趣けりしが義貞死去の後備前國へ立帰り児嶋に隠れ居て尚も本意を達せんるに新田義治を喚奉り諸國本くに田党を募して招き集めたくに隠し越ろふにたりしを宮方る氏に渡して逆意とあり壬生の辺りに切腹の者多し之れ依て餘党の者も数くに成りたれば高徳が志度を遂して義治を共に信濃へ落行後に剃髪して志純と号し其後高徳が終る所を志らず云云

○武備近年此塚をたつかひとつふ正平二十年五月十三日と刻む正平ハ南朝の年号之一統ニ和州多武峯に死したもいへ是亦偽の人の建る成るべし

雲谷山常樂寺 坂越ろ庄村にあり

亀乃甲 赤穂の城下のさしかりの川に石を置て通路に置い形ち亀の甲に似たり俄かに名ハ此甲を越して海へ流れしたまはまへせきて水を城下に通ス

尾崎八幡宮 坂越の南尾崎村にあり別当天台宗金光山弥勒寺慶長十年再建坂越の庄十七ケ村の産土神にて例祭八月十五日赤穂城下よりも御神輿[illegible]ここに出まくも余家武見羅之

新濱村 尾崎の西にあり是浅野内匠頭城主の時海を埋めて築立尚後難を防んが為大石内蔵助に松を植えしにして此松を尚荒並的形の人を掛て径を植しむ 塩ハ赤穂塩とて日本第一の名品なり

赤穂塩　同製

塩濱乃地面廣さ一町より七八反にいたるまでを一軒と定む其一畝乃間に塩ふきをする穴一ツつゝ一軒毎にとべて百穴之を穴のよこに沼井を入るゝ所を築く大きさ弐間四方許にして藻を敷て是に潮を汲ぎ入れば其のしたゝり沙を濾して壺に溜る之○潮を煮には大昔は藻塩とて藻に潮をかき集むるなど歌にもよみて藻をかき入れて其れを入る潮を焼する中世よりこれをやめて沙の上へ潮をまきて日に干すり其を又集りて今の法甚便なり乃塩濱の四方に渠を穿て是へ海より潮を引入て常に湛ゆる又其廣き間には幾筋も地面の中に溝を掘りて四方の潮を通し引き地面の表へ塩するをのづから潮の入りしより段日に曬してかきならしかの沼井の上へ塩砂とうれし其上へ潮のみを汲みて注ぎかけてかの沙の塩をとり濾したるの汁をかく置る砂をば又晩方になりて先出し地面へ撒き耙をもてかきならし晒以て押付け一夜を経れば日毎し鹵気いよいよ此砂に吸上げる故是を取るまでよく日にさらせば鹵気いよいよ上に浮之是をかき集めて次の日又ごとし毎日かくのごとし○置る所の一穴乃潮毎日一斗又升にて百穴十又石之一釜にて煮る所一石二斗ふして一昼夜の間に百穴の潮を十又上へ釜に煮て蒸せり但し其七月の頃は潮多くして二日一夜に煮る之○塩は水一升を煮て又合を得る之一釜に得る所六斗昼夜に十石許なるべし○釜は石と石灰にて塗りなるもの之其大きさ一間に二間斗の角にて深さ三寸許なり竈は其廣さ一丈余りにて藁あげ焚は拉く明より先此釜を制するには釜の大さの板をへつゐのうへに置き其上に河石二寸許なる扁きを並べ其を粘捏したる真菜と松葉の灰とを和して塗込め又其釜の底へつけて鉄の弦を六所にかけ置き其弦にもまた灰にて塗むるなりかくてよく火を焚き乾かしよき頃の候ひて下の板を抜き又下よりも焚き乾かし是とべて火の加減するなりしかし釜損する日数凡そ廿日許にして崩して又新に作る一昼夜絶へず○塩を煮て釜底に残りたるを苦汁とし之を冷して煮る中へ加ふれば塩甚減し是を差塩と云へ魚肉の塩によし又濁るなる故加へは味和らかなり西濱是を制して古濱といひて上品なり味噌溜汁によし東濱は俵にて又斗を納るは是を江戸俵とて西濱は一斗二三升にて小俵之

御崎伊和都比売神社

赤穂郡にあり延喜式神名帳赤穂三座の内也社記不詳ならず　境内甚絶景之○此村近代に始り古人は皆他所より移り来る社は昔大国にあり之を天和の比此處に遷まつる大国は今の西の東乃大岩にありて神前の海中にも大岩ありて踏樸石といふ汐乾く時は此を濡る時は隠れ田船是がため破損しては標を建て往来乃者小船を出して此に備米を送りて例年九月十六日

唐船嶋

赤穂の面にあり今は陸つづきとなりて浜にありし処絶景之赤穂と唐船との間を新浜といふ

塩竈（しほがま）

尾崎八幡

尾崎川　中村波流れて城下に近し

中村　城下の町は荒川より八川迄二丁目は其外堀也り二丁目を中村町といふ中村に流し　の初之二丁目は寺町なり　荒川　城下の入口の川なり揖保川と云川は大川なり

赤穂城　又城の南に至り門て大きく城をめぐり西に流るれる川なり　森侯の居城なり　昔の古へ當國一統乃後備前浦田氏に郡中の事を附屬は其時はじめて此城を築く慶長の年池田輝政一統の後姫路より郡代あり代河内守は政綱は輝興其後浅野内匠頭其後永井家其後森家○兒内匠は五ケ所郷は二郷村数都て九十六ヶ邑城下の所甚繁昌して民家を並べて功用足しと云者也

赤穂街の道より海道といふ昔は周世坂を越して百日坂と姫路といぞうといへり驚て坂を越るは浅野家の者のみ之佐用軍記云後備前浦田家か上月城へ加勢の人数三ツ石か船坂より来る者の吉色を拒ぎ本道を通るを不能浅瀬と經て城へ来りしと云は小皆坂の間道なるべし

墓雲山華岳寺　仮屋村よりあり廟基　和岸和尚曹洞宗　浅野侯建之代々乃墳墓あり菩提所と成給女ぶと華岳院と號し又境内に忠義塚と号して浅野内匠頭長矩公を始め

左右に大石内蔵助親子其外に十五人の義士の石塔並ぶ立に京都泉岳寺を移りたる也し忠義塚の序辭を舉て銘文は畧を

忠義塚序

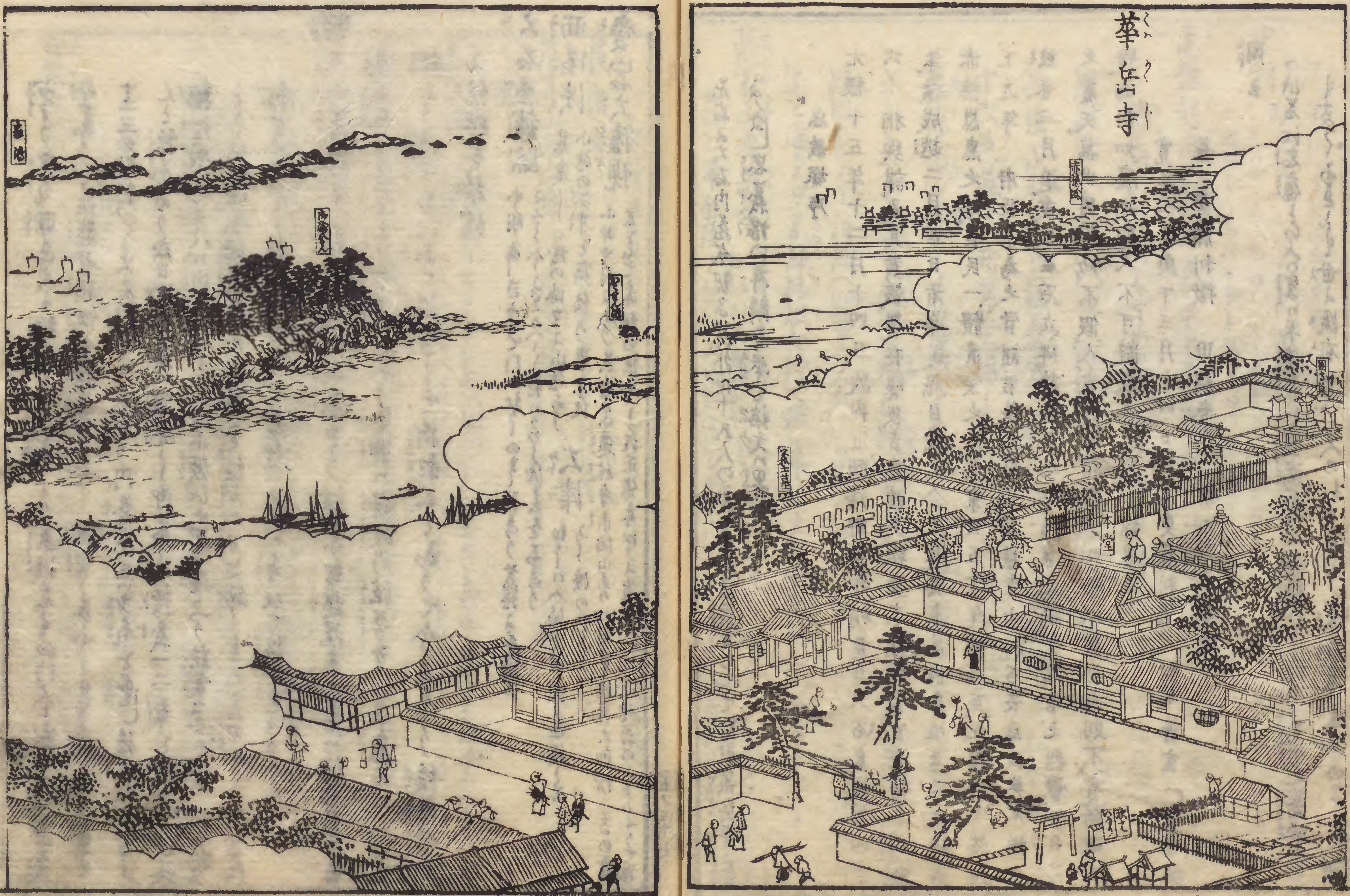
元禄十五年十二月十四日。故内匠頭浅野長矩朝臣。臣大石良雄等四十六人相與謀為其君報讐夜襲殺吉良義英朝臣東身歸官官命拘各處踰年議成越二月四日有命遂賜自裁云今不具其事蓋候自祖考三世得君赤穂恩恵之洽臣民一體遺愛之深其事且五十年語一至此猶涕々然泣下近年　府臣某為之営諸君墓於城北花嶽寺中刻石表爲民莫不悦今茲春三月遂重伐巨石立碑於墓道之東属廉為辭夫諸君之烈譬如日月之麗天萬世罔隊初不假人言與彫刻然非此無以慰思焉則不有斯舉又將為何如廉也郡人不可辭謹為之銘　銘畧之

寛延三年庚午三月十四日郡人奥藤利栄　松本善宣　柴原致長　奥藤利徵　田淵春元　柳田吉甫等建

圖云

○此辰江忠廉といへる人は平庸号を熊陽といふ徳備りたる一先生之著述ありしまぬくあまたも世に流布せしが人の知りる所也之赤穂農業家の子にして教

国立公文書館
National Archives of Japan


華岳寺（くわがくじ）
赤穂城
義士墓
本堂

少より才氣勝れ人に称せらる壮年より東涯先生の門人となり其学を受
学なりて後龍野脇坂侯聘に應し儒官となり今に其子孫あり○先生
十二三の時おもしく大石の鍛に出入あり内蔵介其才氣を愛し後には一人なら
んと称美あり或日浅野侯へ推挙し御前にて経義一二章を講ぜしむ其
辨理明らかなれば内蔵介も大きに歓び家に連かへり飲食をすゝめ引出物
ごとく内蔵介幼少の時の指料定紋付の刀を贈られ其刀今に其家にあれ
侍はこれより○かく我不縁にありて此時の文人之寄以て給を充たりとも

明王山遠林寺 滅山和尚の開基なり禅宗智積院末之旧は池田家の菩
提所なりて雪叢号玄興寺といへり玄興は輝政乃法号なり子息二三人乃位
牌あり浅野家にて改号して祈願所となりて今にあり 後陸路寺
に位牌を移し

大石屋鋪跡 今明家しきみして門はむかしのまゝ残れり荒地に聖樹の
さくら今にさかへく花はかうりし木をも志るせり

西遠浜 甚広し○城の海中に小嶋あり
小嶋の正中を横位乃界とし 大津 むかしは入海の津之今塩浜となれ
浜の内なり

愛宕大権現 小林中村にあり真言宗遠林寺末開山秀如勝軍地蔵太郎坊二名の霊
本をもて赤穂の鎮守とし正保年中に遊佐正純浅野若の命によりて造

郭の縄張は其は正純の叙を以て遊佐は即正純に踏ひし御為しき述

長楽寺 砂子村にあり天台宗境内東西百十間
南北七十間永亀年中草創の基

尼子山西山寺 并 尼子墓 浜市町にあり墓は境内にあり真言宗
高野浄心寺末開基の墓

(濱)

若狭野 奥院慈恩寺村にあり和泉式部のむすめ小式部と契りし事是を云傳へたり
出家禅尼して後は此寺に宿りしと式部をかへりみし家にありしとぞいへり

和泉式部宿木 西内村にあり 此若佐野に昔栗の木あり里俗の云昔此ところに
森五郎太夫といふ者あり京都より小式部を拾ひ来りしを和泉式
部家に同じくきて打しも時雨のしもれば此栗の樹の下に宿りて 今は枯きてなし
志ほの間によものこずゑもくもりぬと今は我身のいつかなりけし

此歌古今雑に出て歌もよしとえらび名をも此歌の据につきて此物語をば撰り出せしもの
なりし伊勢物語の例にて実は和泉式部書写山性空上人によせて遣りしうた
歌は拾遺集にえらばれば和泉式部歯不に来るをも保昌につきそいさるときもれ
まは和泉式部小式部とも上東門院に奉仕して流浪のをも赤穂にし尚考へざし

菖蒲前塚 西山村岳山にあり是済日宮治合戦の後紀政の家臣猪早太菖蒲前を供し此所に
来り憩ひ後を遂られ猪早太の塚は高田西の山村にあり又加東郡に紀政乃
終焉とらひて紀政村総社の名矢代の森にあり又多賀郡高松山長明寺に紀政の墓之

いふゆゑ孫年中境内の池より石樋を堀出しけるに長さ一丈八寸ありしといへり
○沙石集に　故鎌倉右大将家の御時より菖蒲をうゑしさりの其人これを沼めし下流し
鎮れけるを絹振の三郎兵衛尉承りして見けるにそれは同じ数の十七八年なる女房あまた女の
見えしあまたを十人ばかりせて対べ並べて其中に菖蒲を見あてけるが終に絶えしと云
それば見きがうして
まこもぐさいさゝいなまみえずりわひていづれあやめとひきぞわづらふ

八保神社
安室谷岡村梵天宮にて神名帳の古社之元禄年中今の
所に移し猶干鉾門寺の僧其記を修すといへり

高峯牛頭天王
安室の荘山里村にありる山之慶安二年本宮拝殿再営広峯の社には
末社なし西天王と称し牛頭天王を勧請して嵐の荒る故にいふ

高雄山神護寺
因世村にあり開基文覚明応七年正月十六日衲自長恭と記し勅進状の書一通
あり其寛文を志して山より水晶の産ありて大なる塊の風光と云庭に光を放つと
云

千草川
宍粟郡の名川宍粟郡にありて大河之源は宍粟郡敵瑚山より下り里中より出る
て佐用に經上坪川佐用川とい赤穂郡城下の際りてそれは峠川中村川の名あり川となる
古今の遠ては浅みより今の川筋となりて浜市村の東端るくは播中の筆を西に巡る
聖宮の下に至り修より東に折て中村に至り海に入浜市村に古川の跡存せり

有年驛
所為より宿に後きて
笛名三名入至る

有年城趾
有年村にあり赤松信濃守則資三男
於乾郷押部谷に出て之に居る

六道山遍照院蹟
有年より大津の名前
様山といふ今其跡なり

開基未詳
礎多く残れり山上に

大小の五輪の塔
其数をしらず又石をかんで竈の如くなる物あり

姥が竃
といふ其傍に三尺斗なる老女の座像を彫る石
あり近来猶ゆ荒の村民の家に荒れとりうり又西有年村大円寺に
小祠あり大同二年六道山遍照院といふ文字あり黒沢光明なると
時代を同じうれ

五百羅漢
矢野瓜生村にあり石像なり悉く数天を今のみ存せり釈迦文殊普賢加来輪観音
十六羅漢合せて廿躯あり作者未詳数多きを以て五百羅漢といふ

矢野里
矢野の荘にあり矢野の松原矢野山ともよめり欽明帝の御宇に守屋の大臣奥連
播磨国に配流せられ即此所に居を結びて住しよりり三年を経て帰洛せ
来
捧ぐるとらふかり引かへて君をくもいまやのくさと人　為家

三野山観音寺
矢野の荘にあり此
後山西模一二のる山之

三本率都婆
矢野村にあり
由緒未詳

小雅鳥石
有年村の上方小寒る山の岩に小寒るのあり
何とあり今欲しくそさうるに云ふ

無隣山
小寒る山のかくりまありて此一山に燃えしといふ
此山の土を絶焼に入るる所燃て不生寒の寿なり

金華山法雲寺
若縄村にあり延元元年赤松円心建立開山宗峯雪村和尚
峯相記云暦応年中安海西堂開山僧養の時諸国より万人群を為くる
安海雪村と同人なるや年月は二三年の遠ひあり又赤穂と金華縣は二称なる本は赤松
家紋縣昌に倣して大明金華縣に準し文字を着如くし因て山号とする呼ぶなるし

赤松山宝林寺
赤松の荘河野村にあり
告言宗智積院末之
本尊　観世音　釈迦如来
居士
お末
円心則祐則別法禅師に帰依して建立となす
又その僧又円心

が女覚心尼の像あり又別法和尚の像 寺に綸旨令旨御教書并上家の古書秘蔵甲冑等あり二尼ハ其の兵

先の王子なる経このる物あり 傳曰圓心別法和尚に向て曰法に二法なし然るに別法とは如何 和尚答て曰松に古今の色なし然るに赤松とは如何ぞ来る

帰依深かりたり家業ふるに及んで寺を押つくん後光言語中興しく宗山宗門にたつくしむなり

矢野光明山城跡 赤松下野守政秀拠りし所なり 築山城ともいふ政秀これを退し後赤松に護る

感状山城跡 矢野庄にあり建武三年新田義貞白旗の城を攻る別所にして籠りて戦功あり其後同国守護赤松律師則祐居ん又赤松兵部少輔政村居城

鞍居神社 鞍居村にあり式内の古社なり

白旗山古城 赤松の庄赤松村にあり 是赤松家の本城にして圓心の居住之 太平記に出づ 赤松則村ハ次郎と称す具平親王の後なり世々播磨の豪族にて佐用荘赤松に居す 太平記源氏系図 先祖久範左衛門尉始めて赤松と改て氏とす 赤松系図○或曰五世の祖家範始て赤松と称す○異譜曰八世の祖将監季房播磨守となりて赤松と称す 又ハ家範 源氏系図 赤松系図一本或ハ家範五位に叙し左衛門佐となり次郎左衛門と称し播磨守に任ず 則村ハ夙く禅教を崇び薙髪して圓心と号す 系図并年記

○圓心壮年大志ありて人の下に出ることを欲せず元弘の乱に大塔宮護良親王より朝敵退治の令旨を賜りければ圓心大に歓び本国苔縄山に於て義兵を挙ぐ時に走せ付る者千余人故に坂山の里二ケ所に関を居へ山陽山陰の両道を塞ぎければ西国の者止つて国々の勢上洛することかなはずかりつつ中国の兵を杉坂山に拒ぎて二十余人擒へ後に是より直ぐ近国の勢を着せの数千人を摩耶山に陣を構へて六波羅の大軍を破り京師に入て六波羅勢と責傾け勇威を天下に輝しけり 帝還幸ましまして錦衣を賜ひて其功を賞し後播磨の守護職を賜ふべしとの叡慮なりしを帝讒を信じて又播磨の守護職を奪ひしとぞ 眼を延元元年心変じて細川定禅と共に牽ひ尊氏に従ひ官軍と山崎に戦ふ 尊氏中国へ走るの後義貞播磨の諸城を囲み攻る 圓心本城船坂ありし此時圓心中国の尊氏に通じ軍を発さしむ是によつて義貞播州の圍を解く 圓心出ざるを以て室津に於て尊氏に會し是より忠義を存湊川に戦ひて義貞正成を破る正平五年に卒す法雲寺と号す 常楽記系図 子ハ三人 範資。貞範。則祐。氏範。

賛曰 上略 則村の志ハ功名富貴のためにありて忠義の士にあらず子孫皆これに效ひて平ふて不善をなせり良に悲しむべしと云

或日因心ハ功名を挙て君の寵愛のみならず我身の為にも忠を尽して君を
のためにはかれに依て正成の忠をとも因心と表裏せり若や後にあひて守護
職を奪ふでこれのみ正成のためにはかりくもうち乱変がなるべきに此者入間の
ものゝ因心其表裏あるが鉄火のなる之年是に感じて家に入て出家して
食客と二三日奪ひ隠せしに失わくあらぬかしてその
て是にかへり付乱させ比是一旦の恩を忘るゝことはゝへより因心大に昔是

苫縄古城　赤穂郡佐用の荘苫縄村にあり　すなハち因心乃住し所なり

百済僧恵便古跡　矢野のさくにあり　峯相記曰　敏達天皇の御弓削守屋佛法を悪
でる故の僧恵便恵総を播磨に流す二僧矢野の奥に三年居住して後に還俗
まく右次郎左次郎とかへ守屋犯して百々人ありて又僧となつて峯相記に見え
より今日本紀と按ずるに恵便の播磨に居るハ其時佛法いまだ流布せ
ざれバ門と人のなる毅せざれバ以て辺鄙に隠れ居る者とあり守屋死と流罪
とするはあしく馬子恵便を尋ね出して師とした其の敏達の十三年にあり
守屋犯しとあるハ其後五年用明天皇二年にあり守屋死ぬるあなんで恵便
さし帰るにあらず恵総の百済より来るハ崇峻の元年守屋誅死乃翌年也
あり恵便播磨に居る所恵総いまだ日本に来らず恵便と右次郎恵僧と

左次郎といふハ皆年代を考ざる説と似し此時恵便と同く還俗して二僧の
今一人なりしこれを恵総と誤りたるや今此傍の里俗に右次郎左次郎
なりしといひ傳あり

大聖寺城跡　安室郷にあり城主ハ赤松次郎義長伊豆守の居城なり　明應の比義村の為ほろぼされり感状山と号す

舟坂山　山ハ播磨備前美作の国界なり古ハ国の堺しハ年記によりて峰ずつの列なるべし

備後三郎高徳墓　高徳何国にて死したるとしれず国書にみへる所此の墓を
児島高徳備後三郎と称して備前の人也其先
宇佐ハ三宅氏よりて高徳讀書を好む後醍醐帝隠岐国へ遷
幸の時高徳此舟坂山によりて候て帝を奪んとして山陽道を経
じして播磨の今宿より山陰道を出て杉坂にいたり東駕既に過
る事遠くして其他國境の荘に入らせ給ひぬ高徳が謀空しくなりぬ
かくて夜に入御館にのり桜の樹を研て

天莫空勾践　時非無范蠡

と大文字に書附けり主上叡覧ありて龍顔殊に麗くえ給ひけりと云

後遂に正成が力によりて還幸ありしは越王句踐呉に擒れしと
なりしを范蠡が謀略をもて越に還らしめ終に呉を亡しぬるを正成
が忠義に比して書るなり○延元二年新田義貞兵を舟坂に進めて
合戦ありし事共に太平記に見へたり

夫木七

風さむみ立白波をよそ人のみるさかにて見るぞあやうき　湊人よみ人

秦石田之彙輯西播名勝也
澤亭西遊甚山水寺祠丁之
圖之兩月雲屯亭亦勞矣既
選淨寫備次編為之帙並圖
凡一百餘遂併攅之剞劂
氏云史言人達士意之所適

山水莫甚焉為山水之所以
要在位置向背濃淡瀟洒之
中矣位置濃淡飛白等状非
手可状者無以手可状画筆墨
為而畫之所以筆状者在乎
筆墨之験之間矣今西楼山人

之尤甚焉状之手随拈之画
者不筆圓也焉所謂墨痕
潑破之者惟法之泪沒于刹
剛之手矣其復有畫乎哉吾
山子嘗試言人手筆觀乎
新書乗除于之間可也

享和三年癸亥季三月

浪華藍江中直跋

文化元年甲子夏四月

大坂書林

柏原屋清右衛門
柏原屋與左衛門
勝尾屋六兵衛
塩屋忠兵衛

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan